

回の肺切除術)を対象とした。性別は男性7例女性7例で、年齢は35歳から76歳であった。原発臓器別症例数は結腸・直腸癌9例、乳癌3例、腎癌1例、卵巣癌1例であった。【結果】1) 結腸・直腸癌9例においては肺切除後3年11カ月を最高に全例生存中である。直腸癌の1例は11カ月後局所再発が発見され腹会陰式直腸切断術が施行された。肺切除術の1年10カ月前及び2年8カ月前に直腸癌の肝転移に対して肝切除術が施行された2例共に無再発生存中である。2) 乳癌3例中2例は再発した。うち1例は再発を認めたが3年11カ月の現在化学療法、ホルモン療法が効を奏し外来通院中である。3) 腎癌の1例に対しては3回の再切除が行われ、5年8カ月の現在再発を認めるが生存中である。【まとめ】一定の条件を満たした症例においては積極的に外科的切除を試みるべきである。

リンパ節に広範な転移を認めたため、平成5年1月より、CDDP 150 mg×1日間、5FU 1,250 mg×5日間、ロイコボリン 30 mg×5日間を1クールとし、3クルールの術前化学療法が施行された。化学療法後リンパ節転移および原発巣は縮小し(PR)、4月8日開胸食道抜去術が施行された。病理診断は粘表皮癌、深達度 a2 であった。術後さらに上記療法を2クール追加した結果、頸部、縦隔および腹部リンパ節転移は完全に消失した(CR)。6月17日退院し、外来経過観察していたが、平成6年5月上記転移巣の再燃増大をきたしたため、放射線化学療法を行い平成7年1月現在治療中である。遠隔転移を伴うような進行食道癌に対しては、①手術、②化学療法、③放射線療法を組み合わせた集学的治療が必要であると思われ、著効した1例を経験したので報告した。

11) 進行食道癌に対する 5-Fluorouracil 及び Cisplatin 少量持続静注と放射線同時併用の試み

尾崎 利郎・末山 博男  
土田恵美子・杉田 公  
伊藤 猛・酒井 国夫 (新潟大学放射線科)

当科では、新鮮進行食道癌に対して 5-FU 少量持続静注と放射線の同時併用療法を施行してきた。今回はこれに CDDP の少量連日静注を付加して、更なる局所制御率の向上をめざした。照射は一日 1.8~2.0 Gy、週 5回施行し 69 Gy 以上投与した。5-FU は 250~350 mg/m<sup>2</sup>/day を照射を行わない土日以外は持続静注とし、CDDP は 4~7 mg/m<sup>2</sup>/day を週 5回少量持続ないし連日投与した。対象は、PS 良好な進行食道癌 5症例であった。この治療により嚥下障害の改善を 5例中4例に認め、治療終了1カ月後の評価では全例に PR が得られた。1例は8カ月で死亡したが、残り4例は4~12カ月無病生存中である。今後は症例を重ねて、この治療法の有効性を確認するつもりである。

13) 食道癌切除後再建胃管の24時間 pH 測定の臨床的意義

片柳 憲雄・桑原 史郎  
山本 陸生・斉藤 英樹  
桑山 哲治・藍沢 修  
丸田 有吉 (新潟市民病院外科)

【目的】近年、食道癌術後の再建胃管に潰瘍の発生する症例の報告が増加しており、当科でも、胃管潰瘍の心囊内穿破症例を経験した。そこで今回、食道癌切除症例において胃管潰瘍の原因の1つと考えられる酸分泌状態について24時間胃管内 pH 測定を用いて検討した。【対象と方法】1994年に入り胃管にて再建された食道癌症例のうち8例に24時間胃管内 pH 測定を行った。手術例の再建術式は大弯側胃管による胸骨後経路頸部吻合が多数を占めた。カテーテルは経鼻的に先端が幽門輪直上に位置するように留置し、日常生活下に pH の変化を記録、データをコンピューター処理、解析した。【結果】①酸分泌能を有すると考えられる pH≤4 の時間が30%以上を占める症例が4例(50%)見られ、このうち2例に H2 ブロッカーを用いて pH≤4 の時間の低下(内服例7.0%、静注例25.8%)を認めた。②胃管内 pH の日内変動は4型に分類できた。【結語】24時間胃管内 pH 測定は胃管の酸分泌状態を知る上で簡便で有用な方法であると思われた。

12) 集学的治療が著効した胸部食道癌の1例

鈴木 俊繁・植木 匡  
岡 至明・鈴木 茂  
渡辺 和夫・西巻 正力  
藍沢喜久雄・鈴木 方  
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

症例は56歳、男性、胸部食道癌。術前 staging で左鎖骨上窩リンパ節、縦隔リンパ節および腹部大動脈周囲